テ實地教授法視察研究ノ爲本年度五月十五日ヨリ同月二十四日迄十日間教授一人助教授一人之ヲ引率シ京都、大阪、奈良ノ二府一縣ニ出張シテ視察研究ヲ爲サシメタリ

本校ニ於テハ生徒皆通學ナルヲ以テ寄宿舍ニ關シテ申報スヘキ事項ナシ

將来施設上重要ト認ムル件

在外研究員ノ増員並ニ教官ヲ外國ヘ派遣ノ件〔大正十二年度以降報告とほぼ同文につき省略。〕

工藝部塑造教室設置ノ件

本校工藝部ト称シ居ル圖案科金工科鑄造科漆工科ノ各學年生徒ニハ基礎教育トシテ塑造ヲ課スルノ必要アリ　然ルニ適當ナル教室ナキ爲僅々銃器収納室ノ内部ニ改造ヲ加ヘテ假ニ充用シ不備不便ヲ忍ビテ爾来数年ヲ經過セルガ授業上十分ノ効果ヲ収メ難キ遺憾アリ　因ツテ塑造教授ニ適合セル完全ナル設備ヲ有スル一教室ヲ新築スルノ必要アリ

女子部新設ノ件〔大正十年度以降報告とほぼ同文につき省略。〕

本校附属奈良研究所設置ノ件〔大正十二年度以降報告とほぼ同文につき省略。〕

陳列館新築ノ件〔大正十三年度以降報告とほぼ同文につき省略。〕

雑件

生徒實験ノ資ニ供スルタメ諸所ヨリ依嘱ヲ受ケ製作ニ從事シタルモノノ中重ナルモノヲ擧グレバ左ノ如シ

依嘱製作一覧

品目	数量	受託年度	竣功年度	依託者
白鹿置物	壹個	大正十四年度	大正十五年度	三井八郎右ェ門
鐘	壹口	大正十五年度	同	井上勘右ェ門
花盛器	貳個	大正十五年度	同	中嶋清一
賞牌及金具	百五十四個	大正十五年度	同	農林省
伽陵頻胡蝶樂置物	貳個	大正十四年度	大正十五年度	東京市長
莊氏銀製壽像	壹個	大正十五年度	同	中村是公
花盛器	貳個	昭和元年度	昭和元年度	農林省

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術學校近事〔二四巻—八号。T・一五年・三月・一八日〕

○職員辭令

大正十四年十二月二十三日

教授　藤島武二

佛蘭西共和國政府より贈與したる「オフキシエー・ド・ランストリユクシヨン・ピユブリツク」記章を受領し及び佩用するを允許せらる。

同　年同月二十八日（十五年二月廿四、廿五日官報）

教授　長原孝太郎

敍正六位

教授　小林萬吾

敍從六位

教授　水谷鐵也

教授　松岡輝夫

大正十五年一月二十二日

教授　島田佳矣

講師　岡田起作

教員檢定委員會臨時委員被免

同　年同年〔月〕二十三日　助教授　畑　保之

學術研究の爲宮城縣下へ出張を命ず　但往復共一週間の事

同　年二月　三日　教　授　津田　信夫

學術研究の爲京都府大阪府へ出張を命ず　但往復共一週間の事

同　年二月十二日　教　授　白濱　徵

助教授　中野繁次郎

學術實地指導の爲神奈川縣へ出張を命ず　但往復二日間の事

同　年同月十六日　教　授　六角注多良

學術研究の爲和歌山縣へ出張を命ず　但往復共五日間の事

本年の修學旅行

○今年の修學旅行は四月の十四日から同三十日迄と確定　その準備教育として二月二十五日に正木〔直彦〕校長より一般概念に就て講話あり　三月六日と八日九日の三日に亘り約九時間關野貞博士の建築（各時代の特長）に就ての講話あり。

○今年の指導教官及職員で確定したのは矢代幸雄氏坂口肫氏和田季雄氏等

大正十五年四月　奈良京都地方古美術實地見學旅行日程豫定

第一日　四月十四日（水）午後七時三十分　東京驛集合　同八時四十分　同驛發車（姫路行）

第二日　同　十五日（木）午前六時二十二分名古屋驛下車　同八時名古屋驛前にて旅行隊編成　名古屋離宮拜觀（七ッ寺）午後一時四十分　名古屋驛發車（鳥羽行）同四時〇六分　二見浦驛着　伊勢二見　朝日館宿泊

第三日　同　十六日（金）內宮、外宮參拜（徵古館）午後〇時十七分　山田驛發（湊町行）同四時〇六分奈良驛着　奈良市公園內大文字屋旅館宿泊

第四日　同　十七日（土）興福寺　東大寺　同館宿泊

第五日　同　十八日（日）不退寺　法華寺（海龍王寺）西大寺　唐招提寺　藥師寺　三重塔、東院堂、佛足堂　奈良縣生駒郡法隆寺村　大黑屋旅館宿泊

第六日　同　十九日（月）法隆寺　中宮寺（法輪寺、法起寺）　午後三時十一分　法隆寺驛發　同四時三十四分　櫻井驛着輕鐵にて初瀨着　初瀨町　井谷屋旅館宿泊

第七日　同　二十日（火）長谷寺　大野寺　室生寺　奈良縣宇陀郡室生寺宿泊

第八日　同　二十一日（水）聖林寺（文珠院）談山神社　岡寺（橘寺、安居院、久米寺）橿原神宮　神宮前より電車にて奈良へ　大文字屋旅館宿泊

第九日　同　二十二日（木）十輪院（極樂寺）新藥師寺（頭塔）春日神社（手向山八幡）　同旅館宿泊

第十日　同　二十三日（金）博物館　〔同〕旅館宿泊

第十一日　同　二十四日（土）午前八時十五分　奈良驛發　蟹滿寺

平等院（興聖寺、宇治神社、橋寺）　萬福寺　桃山御陵參拜（御香宮）　京都市三條小橋　布袋屋旅館宿泊

第十二日　同二十五日（日）二條離宮　京都御所　仙洞御所（下鴨神社）　修學院離宮（詩仙堂）　同館宿泊

第十三日　同二十六日（月）桂離宮　西本願寺　東寺　同館宿泊

第十四日　同二十七日（火）午前八時　出發三條橋より京阪電車にて　法界寺　醍醐寺三寶院（伏見稻荷）　同館宿泊

第十五日　同二十八日（水）大德寺（孤蓬庵）金閣寺　妙心寺（光悅寺、北野天神、仁和寺）　廣隆寺（嵐山）　同館宿泊

第十六日　同二十九日（木）三十三間堂（智積院、高臺寺）　京都博物館（清水寺、聖恩院、南禪寺、黑谷眞如堂）午後四時三十二分　京都驛發

第十七日　同　三十日（金）午後七時　東京驛着　解散

東京美術學校近事〔二五—一。T・一五・四・十二〕

○職員辭令

大正十五年三月四日

學術研究ノ爲岩手縣下ヘ出張ヲ命ス　但往復共五日間ノ事　教授　津田　信夫

同　年同月十三日　助教授　水谷　武彥

建築學研究ノ爲滿二年間獨逸國ヘ在留ヲ命ス　學校長　正木　直彥

除服出仕

同　年同月二十四日　講師　鈴川　信一

教員檢定委員會臨時委員被仰付　第二部部所屬ヲ命ス

同　年同月二十九日　（會計主任）書記　足立芳五郎

任東北帝國大學事務官　敍高等官六等

同　年同月三十一日　教授　高村　光雲

依願免本官　東北帝國大學事務官（元本校書記）　足立芳五郎

依願免本官

○教官會議　三月十七日午前十時より會議室に於て本年度學年末に於ける生徒及落の決定並に特待生選定等に關する件を議す

本年の特待生（年級は前年のもの）

日本畫科

森村　行雄（二年）

名古谷謙一（三年）

川部東次郎（三年）

岩田覺太郎（四年）

西洋畫科

山口　薫（一年）

島村三七雄（二年）

波多野勝好（三年）

矢田清四郎（四年）

彫刻科塑造部

佐藤　恒三（三年）

平松　豐彥（四年）

松山　兼政（四年）

彫刻科木彫部

中野　四郎（三年）

高橋　泰藏（四年）

建築科

中川　良一（二年）

梅野鐵次郎（三年）

大澤　健吉（四年）　海野　建夫（三年）
柴田　六郎（四年）　八田辰之助（四年）

工藝部一年　鑄造科

中島　正雄（金工科鍛金部）　八井　孝二（二年）
黒田　清絁（純）（三年）

圖案科　漆工科

高橋　俊輔（三年）
黒田千吉郎（二年）　笠間　與男（三年）
羽野　禎三（四年）　小川　金重（四年）

金工科　寫眞科

會田　留吉（二年）　田中　平八（一年）

以上三十九名　昨年に比して七名の増加を見る

卒業式

三月二十四日第三十五回卒業證書授與式を本校大講堂に於て擧行す。式次第例年の如く午前十時新卒業生式場に著席。鈴川教務主任より。〔ママ〕式に關する注意あり。次で職員舊卒業生來賓の著席せらるゝや、正木學校長の式辭に始まり各科總代に卒業證書を授與。校長の告別辭。文部大臣訓辭代讀。卒業生總代（彫刻科塑造部山本稚彦）答辭に式終れり　職員及新卒業生は本館玄關前にて紀念の撮影をなす。

本年は舊卒業生の參列者非常に多數なりしは悅ぶ可き事なり。

卒業生科別人員

科名	本科	選科	特別學生	計
日本畫科	一五	〇	〇	一五
西洋畫科	三五	一	五	四一
彫刻科 塑造部	八	一〇	〇	一八
彫刻科 木彫部	二	四	〇	六
建築科	二	〇	〇	二
圖案科	一一	〇	〇	一一
金工科 彫金部	四	〇	〇	四
金工科 鍛金部	二	一	〇	三
鑄造科	三	一	〇	四
漆工科	四	〇	〇	四
圖畫師範科	二六	〇	〇	二六
合計	一一二	一七	五	一三四

昨年より三十名増加

○卒業生姓名及卒業製作目錄（席次イロハ順）

日本畫科

郊外風景　本科　石井　了介　熊本
林　同　横山　宗唯　富山
待春　同　谷山寅之助　石川
洛外早春（京都八瀨）　同　中尾　蔦一　佐賀
乳牛　同　中田　信　東京
愛禽圖　同　村上　英夫　愛媛
南都三題　一高畑　二不退寺　三都跡村　同　山岡　一　靜岡
幼女　同　山本　乙枝　佐賀
冬近し　同　前坂順三郎　石川
村娘　同　小坂　勝人　東京

花かるた　同　五味　幾藏　山梨
池畔　同　三橋　武顯　東京
春　同　水谷　道彦　東京
日向　同　清水　憲二　富山
風景（相洲下曾我）　同　下田照太郎　靜岡

西洋畫科

診察　自畫像　井手　無一　福岡
ギタと裸女　同　磯野　英夫　福岡
裸體　同　林　敏夫　山形
婦女椅坐像　同　新妻　秀郎　千葉
牧歌　同　西田　正秋　滋賀
青布を纏ふ女　同　小川　智　北海道
裸婦　同　和田　清　千葉
赤衣の女　同　渡邊武比古　福岡
少女　同　片居木良三　埼玉
支度　同　金子　恒憲　新潟
讀書　同　吉田　義雄　北海道
靜物　同　竹内　健藏　青森
母と兒　同　中村　一郎　栃木
髮を裝ふ　同　中村　友治　富山
茶色服の女　同　内田　巖　東京
ヴアイオリン彈ける人　同　黑田　清德　鹿兒島
馬上逍遙　同　倉垣　辰雄　兵庫
遊び疲れて　同　楠本　繁　宮崎

支那服を着た女　同　山田　英一　新潟
夜　同　山田　順治　愛知
青い壺と女　同　松野永三郎　大阪
姉と弟　同　前田　利三　鳥取
郊外にて　同　二口　善雄　石川
白布の上　同　後藤　禎二　東京
合奏　同　遠藤　春雄　東京
裸婦　同　穴田　榮造〔藏〕　石川
女　同　齋藤　種臣　千葉
ファイヤープレースの前　同　齋藤　弘吉　山形
浴女達　同　澤　健太郎　神奈川
少女　同　阪本　靖春　奈良
女　同　喜田　三五　德島
牧草地　同　三谷　長博　島根
女と本　同　三宅　當也　東京
裸女　同　水野　清　兵庫
手を組んだ女　同　山内　貞　千葉
浴後　同　選科　原田　虎猪　東京
千字文　同　特別學生　張　翼　朝鮮平安北道
娘　同　李　昞圭　朝鮮京畿道
臥女　同　李　濟昶　朝鮮京畿道
閨中　同　衞　天霖　支那山西省
化粧　同　丁　衍鏞　支那關東省

彫刻科

塑造部

頭像	本科	池亀 輝治	新潟
踊	同	本保外次郎	富山
春光、胸像、首	同	富樫 政人	東京
腰掛けた女	同	渡邊 弘行	香川
女ノ首	同	田中豊三郎	東京
腕ノ習作、友ノ首	同	山本 稚彦	東京
女、手	同	有馬 純孝	鹿児島
首	同	島津 良藏	京都
綺絆	選科	服部仁三郎	德島
習作	同	高橋 三平	岩手
女	同	牛島 七郎	熊本
女性	同	倉澤 量世	長野
踊	同	松根 多吉	愛媛
女ノ首、白光	同	藤澤 實	東京
女ノ首	同	安達 貫一	島根
坐せる女	同	木村石五郎	青森
習作、肖像	同	三國 慶吉	青森
少女	同	白井 保春	東京

木彫部

龍樹菩薩	本科	中島 誠淳	東京
女立像	同	關谷 充	栃木
立女	選科	大橋 清	東京
鏡水	同	高見 嘉重	富山
想	同	中野 昂	福岡
自像	同	松原 重正	富山

建築科

市民會館	本科	山下 進	愛媛
工場地に建つ新演劇研究場	同	藤田 巖	東京

圖案科

染刺繍應用屏風圖案	本科	吉村 武雄	山口
織物壁張圖案	同	武樋 貞治	新潟
裝飾紋樣圖案	同	上田 幹一	東京
更紗壁掛圖案	同	内田利太郎	埼玉
裝飾模樣圖案	同	小池福太郎	香川
裝飾模樣圖案	同	小池 巖	東京
劇用各種圖案	同	小松 榮	山形
舞踊室用壁面圖案	同	五味 重義	神奈川
染織應用壁掛圖案及埴輪模樣花瓶	同	寺前 爲一	石川
裝飾圖案	同	宮北 武雄	石川
絨氈及レース卓子懸圖案	同	宮澤外興(與)治	石川

金工科

彫金部

踊	本科	飯田喜代鏡	東京
飾置時計	同	林 不二男	東京
寶石箱	同	手塚 重治	青森
夏、文房具	同	兩角 雅次	長野

鍛金部

童話的電氣スタンド	本科	南齋　悌二	山形
閻魔王	同	藤本　茂	東京
禮拜	選科	大塚　龜吉	東京

鑄造科

鑄銅手爐	本科	橋本　宣安	香川
飾壺（乾坤）	同	横山　勝義	香川
卓上電灯（たそかれ）	同	松崎福三郎	東京
置時計	選科	根箭忠次郎	大阪

漆工科

柄香爐（臺附）	本科	磯矢　陽	東京
怪獸文盛物器	同	張間　喜一	石川
經箱	同	菊地　菊雄	福島
小棚	同	出口　正虎	福岡

圖畫師範科

就職學校名	
岩手縣女子師範學校	今井　退藏
北海道札幌第一中學校	保坂　良平
鹿兒島縣指宿中學校	當原　昌松
奈良縣奈良中學校	遠山　八二
名古屋市立第一高等女學校	遠山　清
臺灣に歸任の豫定	王　白淵
千葉縣佐原中學校	亘理　弘
千葉縣佐倉高等女學校	和田　有〔節〕飾
兵庫縣加古川中學校	渡部又三郎
北海道旭川師範學校	渡部美津丸
大分縣師範學校	景山　濱市
新潟縣六日町中學校	神田　豐秋
長崎市立高等女學校	吉野　正孝
兵庫縣神戸第二中學校	谷　信夫
富山縣女子師範學校	天井　陸三
新潟縣長岡女子師範學校	高橋　信重
山形縣女子師範學校	中居　良次
高知縣高知城北中學校	氏家　次郎
兵庫縣龍野高等女學校	臼田　朝雄
愛媛縣師範學校	倉田　三郎
山口縣師範學校	小林　富藏
病氣靜養中	佐藤　重義
岐阜縣女子師範學校	坂井　範一
朝鮮に歸任の豫定	兪　亨穆
鹿兒島縣大口高等女學校	神內　正芳
宮崎縣師範學校	廣隆　軍一

○新入學生　本年の入學志望者は本科五四一人　選科三八人　特別學生二二人　圖畫師範科一七五人合計七七六人で其內から入學試驗の結果一七四人を選拔入學を許可された　人名左の如し。（姓名いろは順　括弧內は入學志望者數）

日本畫科第一年（五三）

石橋　吉郎　石川　大助　橋本　明治
細谷　達三　小野　靜雄　若林　景光
加藤　榮三　高尾　貢　田中　孝
椿　隆司　村上　景介　山田　申吾
八木　博　藤川　武夫　小井土清三郎
後藤多喜夫　三浦　文治　宮崎　有昭
東山　新吉　鈴木巳代二（巳）

西洋畫科第一年（二八三）

池田　直輔　石井四郎三　伊勢　正義
服部　保祐　原　鼎　新原　俊吉
西　孝親　德永　周末　小原　雄二
尾田　龍　大貫　松三　渡邊　正一
門井　壽　川上　圭次　谷內　俊夫
田代　博　內藤　億　中村　秀夫
長曾根八郎　村上　徹之　國枝　芳夫
大和　義男　山田　直次　山下　武夫
松田　文雄　古厩　博人　後藤　俊春
小山　鵠郎　手塚　一郎　安部　義行
荒井　賢孝　佐藤　敬　坂入　辰雄
木村　捷司　宮田　武彥　深山　鎭男
宮下　琢郎　東　義雄　廣澤　環
森田　勝

西洋畫科特別學生第一年（一九）

張　舜卿　林　學善　葉　仲豪
吳　占壽　金　應杓　金　瑢煖

彫刻科塑造部第一年（二九）

服部不二之　大須賀　力　奧田　勝
緒方　敏雄　川邊　政一　巽　一太郎
中野右左人　中澤　安雄　黑田　嘉治
松尾二兵衞　古賀　勝郎　佐土　哲二
喜田　三五　三木　凱歌　森　新造

彫刻選科塑造部第一年（三一）

池田　晃　金武　朝健　田口喜與志
津島　圭治　野々村一男　野木　次郎
矢崎　虎夫　古屋　太郎　近藤　要
阿部　勝三　岸崎猪之助

彫刻科塑造部特別學生第一年（二）

陳　在癸　金　斗一

彫刻科木彫部第一年（一五）

石崎　芳夫　萩原　省三　田近　政二
辻堂善次郎　長沼　孝三　米原　一成
松原　正明　齋藤　誠一　白土　俊雄
潮見　清

彫刻選科木彫部第一年（五）

中村　壽藏

建築科第一年（五八）

磯山　正　岡　百壽　吉村　順三
曾根　駒雄　倉橋　宣勝　佐藤　誠一

相原　茂

圖案科第一年（七七）

西方　勝雄　大田　外男　小川　洗二
加藤　次雄　高橋　信夫　坪井　鶴吉
中田　滿雄　村田　吉雄〔雄三〕　二見　源治
芥川　猛次　北川　三雄　疋田　三郎
關　力　鈴木　五郎

圖案科特別學生第一年（一）

李　順石

金工科彫金部第一年（一〇）

織田　愼一　竹内元之助　内藤　四郎
内島　政二　福田　隆　後藤　學一

金工科鍛金部第一年（三）

鷲田　孝　矢部　國士

金工選科鍛金部第二年（三）

大谷　健三　秋田頼一郎　湯川　豐

鑄造科第一年（七）

老子　秀雄　金山　智宗　田中　武雄
山本　達次　近藤　義和　安部　貞世
清水　巖

漆工科第一年（六）

彼谷　清　淺野　豐

圖畫師範科第一年（一七五）

岩下　資治　石山　忠夫　原　竹男
林　繁雄　范　洪甲　本多　三郎
太田　留三　岡田　清　加藤藤三郎
河野　太郎　中村　十郎　中島　穣
村上　一雄　山田　武　山下大五郎
松崎　愛人　松本　光　福井　望
藤本多賀喜　高妻巳子雄　青山　龍水
志賀　完　平井〔于〕善一　本谷　辰次
森　隆太郎　鮮于　澹　鈴木　清

本年は入學後疾病の爲め中途退學の不幸者を減ずる爲め體格檢査を一層嚴格にした。

○職員動靜

水谷武彦氏の出發　在外研究員として建築學研究の爲め二ヶ年間獨逸へ留學を命ぜられたる同氏は四月二十六日正午横濱出帆の北野丸に乘船その途に上らるゝ由　東京驛出發は同日朝。

東京美術學校近事〔二五―二〇。T・一五・五・二五〕

○職員辭令

大正十五年二月十五日（四月七日官報）

敍從七位　助教授　坂口　肫

同　年三月一日（四月十日官報）

（各通）　教授　岡田三郎助
敍從四位　教授　和田　英作

同　年三月二十七日（四月二日官報）

教授　水谷　鐵也

敍勳六等賜瑞寶章

同　年三月三十一日

依願解雇　雇　松崎　正則

教授　島田　佳矣

學術研究の爲福井縣へ出張を命ず　但往復共一週間の事

書記　筒崎　謙齋

會計主任を命ず　國有財產監守者を命ず

同　年四月九日

助教授　坂口　肫

同　和田　季雄

學術實地指導の爲三重縣奈良縣京都府へ出張を命ず　但往復共十七日間の事

助手　青山　新

教務囑託　岩崎　巖

雇　佐藤　重吉

本校生徒修學旅行に付三重縣奈良縣京都府へ出張を命ず　但往復共十七日間の事

同　年同月十五日

元教授　高村　光雲

敍從三位　特旨を以て位一級被進

金澤　庸治

本校講師を囑託す　但建築科製圖實習及用器畫法授業擔任の事

京都府技師　阪谷良之進

本校生徒京都府修學旅行に付臨時實地指導を囑託す

奈良縣技師　岸　熊吉

正七位　新納忠之介

本校生徒奈良縣修學旅行に付臨時實地指導を囑託す

同　年同月十九日

講師　鈴川　信一

學術實地指導の爲京都府へ出張を命ず　但往復共十二日間の事

右出張中京都高等工藝學校及京都繪畫專門學校に就て視察調査すべし

書記　宮本　純一

東京府へ出向を命ず

同　年同月廿二日

教授　沼田勇次郎

金工科鑄造科に課する彫刻實習授業擔任を命ず

教授　水谷　鐵也

金工科鑄造科に課する彫刻實習授業擔任を免ず

正七位勳七等　足立芳五郎

本校事務を囑託し會計掛勤務を命ず

書記　宮本　純一

東京市立京橋商業學校教諭に任ず

同　年同月二十三日

森田　武

高村　豐周

（各通）

任東京美術學校助教授　西田　正秋
圖案科圖案實習〔授〕業擔任を命ず　助教授　森田　武
鑄造科鑄造實習授業擔任を命ず　助教授　高村　豐周
解剖學及西洋畫實習授業擔任を命ず　助教授　西田　正秋
任東京美術學校書記　雇　谷本千代雄
文庫掛を命ず　書記　谷本千代雄
講師囑託を解く　講師　森田　武
同　年同月二十六日　教授　松岡　輝夫
敍勳六等授瑞寶章
同　年同月三十日　教授　島田　佳矣
學術研究の爲石川縣へ出張を命ず　但往復共六日間の事　田中　豐藏
本校講師を囑託す　但中央亞細亞美術史授業擔任の事　山崎覺太郎
本校講師を囑託す　但漆工科漆工實習授業擔任の事　正八位　宮本　純一
本校事務を囑託し庶務掛勤務を命ず　臨時雇　榧本龜次郎
東京美術學校〔ママ〕を命ず　文庫掛を命ず　助手　山崎覺太郎
東京美術學校助手を免す

○正木校長は古美術の調査並に奈良法隆寺に於て擧行されたる聖德太子奉讃會參列を兼ね四月十日より同月十四日迄奈良縣に出張せられたり

○大村教授は今回文部省の承諾を受け外務省對支文化事業部より旅費を給せられ約一ヶ月の豫定にて支那古美術研究の爲め四月廿九日東京出發支那へ出張せられたり　其目的は主として近年支那江蘇省吳縣の東南角直鎭保聖寺大殿（梁天監中建立）の壁上に於て發見せられたる唐の楊惠之作羅漢像十數軀現存せるを實査し及び北京に於て前清朝尙藏の寶物類を蒐集陳列せる故宮博物院を觀覽して其列品に就き研究するに在り　其旅行日程（豫定）の概略は左記の通なり

一四月廿九日午後七時東京出發、三十日神戸港より乘船、五月二日上海着
一五月五日上海出發、江蘇省蘇州を經由、角直鎭に到り同所に於て唐代塑像調査研究、滯在凡七日間の豫定
一五月十二日角直鎭出發、上海へ歸着
一五月十五日上海を出發し十七日北京到着、凡七日間滯在、古物陳列所故〔宮〕宮博物院及個人收藏品見學
一五月廿四日北京出發、天津より海路神戸に至り五月廿九日歸京

の豫定

東京美術學校近事〔二二五―三。T・一五・六・二八〕

○職員辭令

大正十五年四月十五日　元教授　高村　光雲

敍從三位　特旨を以て位一級被進

同　年同月二十六日　教授　松岡　輝夫

敍勳六等授瑞寶章

同　年五月一日　教授　結城　貞松

第五回朝鮮美術審査委員會委員を囑託す

同　年同月四日　教授　白濱　徵

學術研究の爲福島縣へ出張を命す　但往復共三日間の事

同　年同月五日　教授　北村　西望

彫刻科木彫部に課する塑造實習授業擔任兼務を命す

同　年同月十一日　教授　白濱　徵

學術實地指導の爲京都府大阪府奈良縣へ出張を命す　但往復共十日間の事

同　年同月十四日　會計檢査院書記從七位勳七等　古田　坂松

任東京美術學校書記　書記　古田　坂松

會計掛を命ず

同　年同月廿九日　助教授　田邊　至

學術研究の爲千葉縣へ出張を命ず　但往復共一日間の事

同　年同月卅一日　講師　伊東　亮次

依願解囑

○文庫掛主任北浦〔大介〕書記は四月三十日付東京府より同府美術館事務を囑託せらる

○文庫掛員佐藤ツル氏は病氣の處六月二日死去したり

○六角〔注多良〕教授は五月三十一日付東京帝國大學より朝鮮平壤府所在樂浪古墳發掘品調査を囑託せられ又朝鮮總督府よりも六月五日付樂浪漆器整理事務を臨時囑託せられたり

○小場〔恒吉〕講師は朝鮮總督府より囑託せられたる古蹟調査委員の用務に依り四月八日出發朝鮮に赴きし處五月一日歸京されたり

○大村〔西崖〕教授は四月廿九日出發支那に旅行の處五月二十二日歸京されたり　其實地調査せられたる江蘇省角直鎭保聖寺大殿壁上の羅漢塑像に關する傳說考證、意見を目下鋭意起稿中にて其撮影と併せて近々出版公表せらるゝ由

○結城〔貞松〕教授は本年朝鮮美術展覽會審査委員を同總督府より囑託せられ五月五日出發朝鮮京城に赴き審査任務を了し總督府よ

り案内の吏員を附せられ金剛山に登攀し又慶州平壤等に赴き古墳發掘の狀況を觀覽し五月二十八日歸京されたり

○伊藤講師（龍吉氏）は五月十四日囑託期限滿了し解囑となれり

○高村光雲先生が老齡の故を以つて先般教授の職を辭せられたので、學校の彫刻關係の者が此の期に一度寄合をしようと云ふことで六月六日の午后六時から伊豫紋で小宴を催した。來り會する者、高村光雲先生、大村西崖氏、鈴川信一氏、沼田一雅氏、水谷鐵也氏、朝倉文夫氏、建畠大夢氏、北村西望氏、關野聖雲氏、和田光石氏の十名、侍る者十數名、初夏の夜に房〔ママ〕はしい溫か味のあるゆかしい會合であつた。

東京美術學校近事〔二二五―四。T・一五・九・二八〕

○職員辭令

大正十五年五月三十一日　助教授　長口　宮吉

同　畑　保之

任東京高等工藝學校助教授

同　年六月十四日　助教授　中野繁次郎

大阪府へ出向を命ず

同　年同年〔月〕十六日　從三位勳二等　高村　光雲

東京美術學校名譽教授の名稱を授く

同　年同月十九日　助教授　中野繁次郎

大阪府立夕陽丘高等女學校教諭に任ず

同　年同月廿五日　長口　宮吉

本校講師を囑託す　但工藝化學實驗授業擔任の事

同　年同月三十日　教授　岡田三郎助

陞敍高等官二等

依賴〔願〕解囑　講師　久米　福衞

東京帝國大學教授

陞敍高等官一等　講師　關野　貞

同　年七月三日　事務囑託　足立芳五郎

除服出仕　書記　北浦　大介

大阪府へ出向を命ず　但往復共十日間の事

同　年同月九日　東京博物館學藝官

陞敍高等官四等　講師　中田　俊造

同　年同月十九日　助教授　和田　季雄

學術研究の爲千葉縣下へ出張を命ず　但往復共三日間の事

同　年八月十六日　教授　六角注多良

學術研究の爲石川縣へ出張を命ず　但往復共一週間の事

同　年同月十二日　東京府立第六高等女學校　教諭　高橋　吉雄

任東京美術學校助教授

同　年同月十九日　講師　鈴川　信一

教員檢定委員會臨時委員被免

○正木〔直彦〕校長は日支繪畫聯合展覽會を大阪市に開設せらるゝに關し七月六日より同月十日迄同市に出張せられたり

○元教授高村光雲翁は在職三十餘年の功績に依り本校名譽教授の名稱を授けらるゝ　實に本校最初の名譽教授なり

○本年十月十三日〔ママ〕ヨリ同月二十三日に至る十日間本校に於て文部省主催の圖畫科講習會を開設せらるゝに決定し白濱〔徵〕、長原〔孝太郎〕、矢代〔幸雄〕三教授及び村田〔良策〕、齋藤〔佳藏〕兩講師外に東京帝室博物館鑑査官溝口禎次郎氏は七月十三日付孰れも講習會講師を囑託されたり　其の擔任標題左の如し

一、各學校に於ける圖畫科の實際（八時間）　白濱　教授
一、日本繪畫史上に於ける重なる作品（八時間）　溝口鑑査官
一、西洋繪畫史上に於ける重なる作品（八時間）　矢代　教授
一、美學及藝術學概論（八時間）　村田　講師
一、圖案と裝飾美術（八時間）　齋藤　講師
一、繪畫實習（木炭畫、油繪）（二十時間）　長原　教授

此の外松田〔義之〕助教授、岡〔四郎〕教務囑託は同講習會の助手を囑託され增井〔兼吉〕書記は同會事務取扱を囑託されたり。

○沼田〔勇次郎〕教授令閨千代子樣九月十日永逝せらる

東京美術學校近事〔二二五―五。T・一五・一〇・二八〕

○職員辭令

大正十五年九月一日　助教授　高橋　吉雄

圖畫師範料〔科〕自在畫及手工授業擔任ヲ命ス

同　年同月十五日　助手　青山　新

助手ヲ免ス　本校講師ヲ囑託ス　但西洋彫刻史授業擔任ノ事

同　年同月十七日　書記　谷本千代雄

神奈川縣出張ヲ命ス　但往復共一日間ノ事

同　年同月十六日　教授　白濱　徵

大正十五年度文部省視學委員ヲ命ス　栃木縣へ出張ヲ命ス

講師　岡田　起作

教員檢定委員會臨時委員被仰付

同　年同月十八日　教授　沼田勇次郎

除服出仕

同　年同月二十九日　教授　森井　健介

學術研究ノ爲石川福井二縣へ出張ヲ命ス　但往復共六日間ノ事

同　年同月三十日　書記　筒崎　謙齋

臨時雇ヲ命ス　但文庫掛勤務　向　英就

同　年十月八日　書記　古田　坂松

群馬栃木茨城三縣下ヘ出張ヲ命ス　但往復共五日間ノ事　雇　佐藤　重吉

群馬縣桐生市ヘ出張ヲ命ス　但往復共三日間ノ事

○帝國美術院ノ委員タル小林〔万吾〕、建畠〔弥一郎〕兩教授ハ今秋ノ同院美術展覽會審査員ヲ命セラル

東京美術學校近事〔二五―六。T・一五・十二・二五〕

○職員辭令

大正十五年十月十六日　講師　山崎覺太郎

圖畫師範科手工（漆工）授業擔任兼務ヲ命ス

同　年同月三十日　村瀨　健爾

東京美術學校雇ヲ命ス　文庫掛ヲ命ス

同　年十一月三日　助教授　坂口　肫

學術研究ノ爲長野縣ヘ出張ヲ命ス　書記　北浦　大介

大阪府及奈良縣ヘ出張ヲ命ス

同　年同月十五日　教授　白濱　徵

（各通）　同　島田　佳矣

敍從四位

○正木〔直彦〕校長ハ正倉院御物曝涼拜觀ヲ兼美術ニ關スル調査ノ爲十一月八日ヨリ同月十四日ニ至ル間奈良縣ヘ出張セラル

本校設置記念式及勤續者祝賀會記事

本校設置記念日は毎年十月四日にして當日記念式を擧行するは恒例なるが本年は校務上の都合並に正木〔直彦〕校長、白濱〔徵〕教授外三名の勤續二十五年祝賀、高村光雲翁本校名譽教授となられたるを祝賀等併せ行ふ準備もありて十一月四日（木曜）に繰り延ばし〔挙〕學行することゝなれり。

十一月四日は前日來の秋晴續にて好天氣なり　定刻（午前九時）職員七十餘人、在校生徒の內四百餘人、校外卒業生來賓八十餘人大講堂に參集著席す　正木〔直彦〕校長登壇して記念式開會の辭あり　併せて高村〔光雲〕翁名譽教〔授〕援となられたるを祝し並に自己及び白濱〔徵〕教授外三名の勤續二十五年祝賀を兼ね行ふ意味を述べらる　次に高村翁代りて登壇し名譽教授となりし謝辭を述べ次に本校職員厚誼會を代表して正木校長に對する祝賀之辭一篇を朗讀さる　了りて記念品目錄を進呈し校長之を受らる　次に本年勤續滿二十五年に達したる左記四先生祝賀の式あり。

教　授　白濱　徵先生
同　津田信夫先生
助教授　千頭庸哉先生
講　師　合田　清先生

先づ校長より四先生の功勞を述べられ職員厚誼會より贈呈する感謝狀及記念品目錄を順次に交付さる　津田教授は勤續者總代として謝辭を述ぶ　當日勤續〔統〕者の首席たる白濱教授は去る九月末より病氣入院中にて參列なかりしは殊に遺憾に感ぜられしが代りて令息令孃參列せられ令孃（十五歳）の起つて壇に登り校長より授けらるゝ感謝狀及記念品を受領せる時生徒席より起れる拍手は堂を憾かしたり。

右了りて正木校長は本日の記念式並に祝賀式に對する一場の感想講話を半時間餘に渉りて演述せられ是にて式全く畢り直に餘興狂言の開始に遷る　其の上品にして輕妙、晒〔洒〕脫にして滑稽味十分なる狂言振には一同腹の皮の撚るゝを覺えず〔ママ〕歡笑喝采裏に十二時半餘興終りを告げたり。

此日會議室を卒業生來賓者の休憩所として茶〔茶〕菓を饗し正木校長へ贈呈する記念品の內製作濟のもの又は半製品を陳列して一同の觀覽に供したり　贈呈品は飾棚並に飾品一揃にして之に繪卷物壹軸、畫帖壹册を添ふ　本校職員が各一品づゝを引受け得意の妙腕を揮ひ丹精を凝らして製作さるゝものなり　全部完成の上更に詳細を記載して發表することゝせん。

又此日の午後五時より職員厚誼會主催にて正木校長、高村翁、勤續四先生を上野精養軒に招待して一大祝賀莚を開くことゝなり居り在京の卒業者諸氏にも治〔浩〕く賛同來會を請ひ置きたり　午前中の好天氣は午後に至りて曇り始め四時前より小雨來り參集の時間頃には可なりの雨天となり幾分氣遣はれしにも拘はらず定例迄には續〔統〕々として精養軒に參集され職員側七十名（招待者は此外なり）卒業者側百餘名の多數に達し近來罕なる大祝莚開かれ席上久米〔桂一郎〕教授は起つて厚誼會を代表して述べらるゝ所あり高村翁、正木校長も迭ひに起つて謝辭を述べ且つ趣味饑き一場の談話ありたり　會食終り休憩室にて各自懇談歡語を交へ夜の深くるを知らず和氣靄々の間九時頃散會したり。

尙ほ高村翁が朗讀せられたる正木校長祝賀の辭は次の如し

祝賀之辭

今玆ニ正木校長在職滿二十五年ニ達セラレ本日ヲ以テ其祝賀ノ式ヲ行フハ職員並生徒一同ノ齊シク觀喜ニ堪エザル所ナリ　回顧スレバ貴下ノ始メテ本校ニ臨マレシハ明治三十四年八月ニ在リ　當時本校創設後十餘歳ニ過ギズ校運未ダ全ク隆昌ノ域ニ達セズ　乃チ其改善推〔進〕歩ニ於テ貴下ノ手腕ニ竣ツモノ固ヨリ多々ナリト爲ス　貴下就任以來孜々トシテ盡瘁〔倦〕マズ明敏ノ資ヲ以テ能ク美術界ノ趨勢ヲ洞察シ內ハ則チ校運ノ進展ヲ圖リ外ハ以テ耕術〔美〕ノ發揚ニ勉メラレタリ　今ヤ貴下ノ訓育ヲ受ケタル卒業者ハ天下ニ治〔治カ〕クシテ美術界ヲ風靡シ本校ノ聲名ハ遠ク海外諸邦ニ聞知セラルヽニ至ル　是實ニ貴下廿五年ノ功績ヲ明證スル所以ナリ　本會ハ玆ニ聊カ記念品ヲ贈呈シ以テ深謝ノ微忱ヲ表シ貴下ノ光榮ヲ祝福ス

大正十五年十一月四日

東京美術學校職員厚誼會

代表　高村　光雲

又勤續二十五年の四氏に贈呈したる感謝狀は左の如し

感謝狀

教授　白濱　徵

貴下ハ明治三十四年ヨリ東京美術學校ニ奉職セラレ勞績ヲ積ミ以テ今日ニ逮ビ勤續滿二十五年ニ達セラレ洵ニ欣悅ニ堪エザル所ナリ　依テ本會ハ玆ニ祝賀ノ式ヲ擧ゲ聊カ記念品ヲ贈呈シ以テ感謝ノ意ヲ表ス

大正十五年十一月四日

東京美術學校職員厚誼會長正木直彥　印

外三氏の分は同文なるに付省略す

東京美術學校近事〔二五―七。昭和S・二・二・一〕

○職員辭令

大正十五年十一月二十六日

教授　平田　榮二

助教授　松田　義之

（各通）

同　高橋　吉雄

學術實地指導ノ爲靜岡縣下ヘ出張ヲ命ス　但往復共一日間ノ事

同　年同月三十日

教授　津田　信夫

學術研究ノ爲大阪府ヘ出張ヲ命ス　但往復共四日間ノ事

同　年同月二十九日

講師　鎌田彌壽治

紋勳五等授瑞寶章

同　年十二月十日

深瀨　嘉臣

東京美術學校助手ヲ命ス　金工科勤務ヲ命ス

同　年十二月二十二日

學校長　正木　直彥

白耳義國皇帝陛下ヨリ贈與シタル「グラン、オフキシエー、レオポール」第二世勳章ヲ受領及ビ佩用スルヲ允許セラル

昭和二年一月七日

教授　大島勝次郎

（各通）

同　津田　信夫

同　清水　龜藏

陞敍高等官五等

田邊孝次氏一月十七日サイベリア丸にて歸朝せらる　石田英一氏は三月二十八日横濱出帆の賀茂丸にて渡歐せらるゝ由（文部省在外研究員）

軍事教練査閲

本校に軍事教育が始まつて、山口一二少佐が赴任されたのは一昨年の春だつた。去る二月二日（昭和二年）にその第二回の査閲が本校校庭運動場で施行された。

教練に先つて九時頃から會議室に査閲官納富中將（廣次）副官學校側から正木〔直彥〕校長鈴川〔信一〕教務主任及體操關係教官等會合　山口〔一二〕軍事教官から詳細なる報告（計畫、實施並に

影響等に就て）あり教練に移る

各本科一年並師範科一年は執銃各個分隊教練

各本科二年並師範科二年は執銃帶劍　各個、分隊教練

各本科三年は執銃帶劍　分隊、小隊密集、戰鬪教練

各本科四年並師範科三年は執銃帶劍各個、小隊、密集戰鬪教練

中隊密集教練を行ふ

各年級共先運動場の北端に南面して集合　山口少佐の指揮の許に校長及査閲官の閲兵に始まり約四五十分宛の教練を實施す　分隊、小隊の指揮は同級生中より特に軍隊生活の經驗なき者を指名す　中隊教練は山口少佐自ら指揮せらる

教練を終りたる後各年級共學科の詢問あり　副官は絶えず列中の生徒に近づき學科的質問せらる

正午終つて午後一時より再び査閲官校長以下會議室に入り査閲官より講評を受く

成績良好指揮者の態度及列中生の眞面目な事は昨年とは全く異り國家の軍隊としても辱しからず見受く

講評終つてより打〔脱字〕て軍事教練並に體育體操に關し及びその施設等に就き互に意見の交換をなす

軍事教練に附隨して本學期中に本科四年及圖畫師範科三年全體の實彈射擊演習を行ふ筈

御大葬に關して

二月七日御大葬當日本校に於ては午前十時職員生徒全部大講堂に集合　正木校長の奉悼の辭あり　大正天皇御眞影に最後の御拜をなす　當日は雇員、給仕、小使に至る迄淺〔洩〕なく御拜をなさしむ　尙本校より本校を代表して職員十五名生徒五十名二重橋外に於て御葬儀を奉送す　又校長以下相當資格者は或は葬場殿に先着或は二重橋より供奉して御大葬に參列す

關連事項

①　写真科廃止、移管

本校の臨時写真科は小川一真を代表とする写真業界、正木直彦校長、鎌田弥寿治、結城林蔵らの努力により大正四年に設置され、同十二年に写真科と改称されたが、同十五年五月十九日、文部省令第二十二号を以て廃止された。その間に送り出された卒業生は四十七名であった。

写真科の東京高等工芸学校への移管、教官の異動については既に製版科廃止の項で述べたが（124頁）、移管の経緯に蹉跌があったため、同科が本校に存在した期間の後半部は運営が変則的であった。即ち、大正九、十年度は生徒を募集せず、同十一年度は募集。同十二、十三年度は募集せず、同十四年度は募集という具合で、同科廃止の時点では同十四年度入学生七名が居り、彼らは東京高等工芸学校印刷工芸科写真部に編入された。

教官の異動について言えば、製版科廃止の項の記述と多少重複するが、次のとおりである。

鎌田弥寿治　講師、大正十五年一月～五月写真科主任、写真術担当
東京高等工芸学校教授（印刷工芸科長）

留任して金工科、鋳造科の工芸化学担当講師として昭和三年三月まで在職。

森芳太郎　教授、工芸化学、物理学、写真術担当